



「繁殖ロス＝経営ロス！分娩間隔の短縮の効果って？」

寒さが落ち着き、春めいた日も増えてきました。とはいえ、朝晩はまだまだ冷え込みます。これまで同様、寒さ対策と換気はしっかり行いましょう。さて、今回は、「分娩間隔の短縮」がテーマです。意識的な発情発見を行い、繁殖と経営両方をしっかりとまわしていきましょう！

畜産の今の情勢をおさえる～過去5年間の推移～

図1 県南市場平均価格の推移(税込)

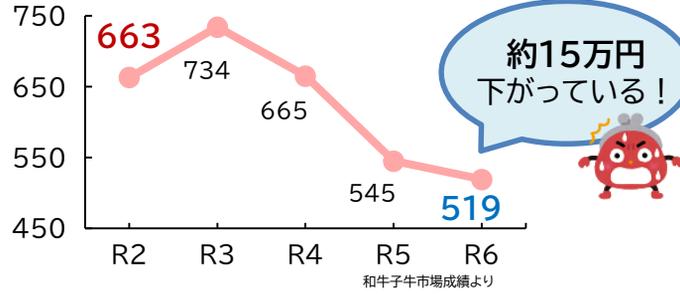
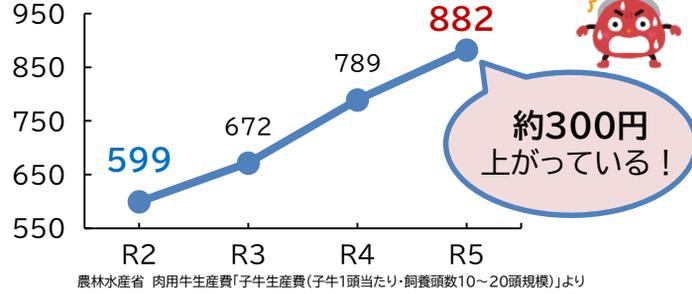


図2 飼料価格の推移(1日1頭あたり)



こんなに相場が下がってしまえば、繁殖が経営に与える影響なんて大したことないよ！

どうでしょうか？分娩間隔の短縮効果を計算してみましょう！

分娩間隔の短縮効果

$$= \frac{\text{市場平均価格}}{\text{平均分娩間隔}} + \text{1日あたりの餌代}$$

	市場平均価格(千円) ①	平均分娩間隔(日)※ ②	1日あたりの餌代(円) ③	分娩間隔1日短縮による経済効果(円) ①÷②+③
R2	663	415	599	2,200
R3	734	415	672	2,400
R4	665	414	789	2,400
R5	545	412	882	2,200
R6	519	410	-	-

※県南市場管内4JAの加重平均

1日に得られるはずの収入がわかるよ！
分娩間隔が1日長くなれば
この収入は得られなくなるとことだね

上の表のとおり市場の相場が下がっても、**分娩間隔の短縮効果は変わらないのです！**

ちなみに、分娩間隔が410日から30日短縮して、380日※になったら… ※県の目標値

〔20頭規模の場合〕2,200円/日×30日×20頭 = **1,320,000円**

価格が低迷している今こそ、分娩間隔の短縮で減収をカバーしましょう！

30日短縮すると
130万円以上の
経済効果があるんだね！！

分娩間隔の短縮に向けて～牛の発情周期を再確認！～

分娩間隔短縮の方法はたくさんありますが、まずは「牛の発情周期」についてお話しします。

牛の発情周期は約21日ですが、周期どおりに発情が来ても

実は、**受胎しづらい時期**があるのは知っていますか？

卵は排卵する約60日前に誕生します。

誕生したての赤ちゃんの卵はとても弱く、大きなストレスがかかると、

排卵する前に消失したり、排卵しても受精能力がない卵になってしまいます。

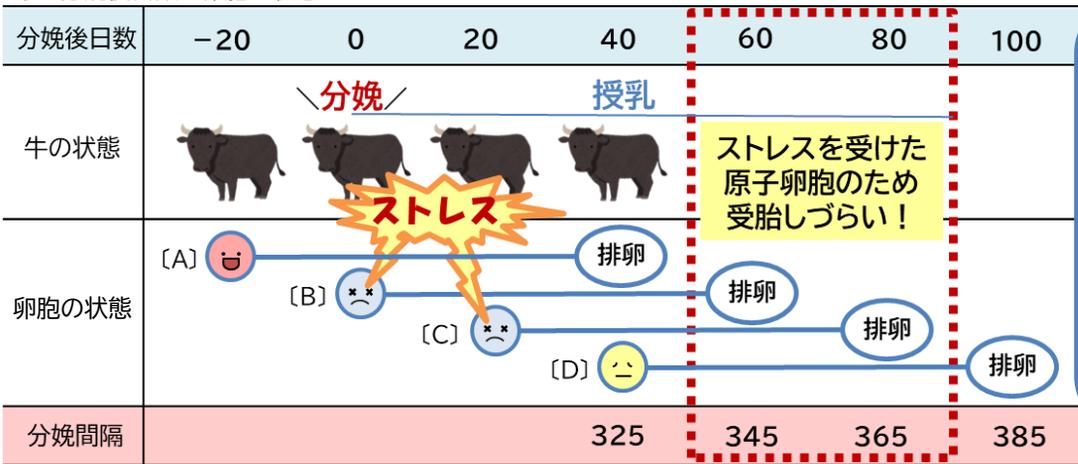
そして、繁殖牛にとって最も大きなストレスが「**分娩**」です。次ページの表を見てください！

大きなストレスとは…

- ・低栄養状態による急激な体重減少
- ・恐怖
- ・暑さ
- ・寒さ
- ・痛み など



表 分娩後日数と卵胞の状態



左の図のとおり、分娩後すぐにストレスはなくなりません。**分娩後60~80日後に**排卵する卵は、赤ちゃん卵の時にストレスを受けたため**受胎しづらい可能性が高い**のです。



なるほど！でも、分娩後100日でくる排卵でも、分娩間隔は385日になるよね。それなら、そのときに授精すれば良いかな～。

分娩のストレスがなくなったとしても、授乳中の母牛はエネルギー不足になりやすく、その時期に誕生する赤ちゃん卵[D]も質が良くない可能性があります。それに、一回で受胎するとは限りません。40日に排卵する卵[A]の方が良いものであることが多いんです！

この分娩後日数と卵の特徴を踏まえたうえで、

①分娩後40日の発情で授精しよう！

⇒ 40日に良い発情を見つけても、まだ早いから次にしようと思っていると60日、80日の卵がイマイチでつけられないことも。子宮の状態が良ければ積極的に授精しよう！

②分娩前後の母牛のストレスを減らそう！

⇒ 分娩房は、寝起きが自由にできる広めの単房で、分娩に集中できる環境にしましょう。分娩前後の増し飼いや忘れずに！

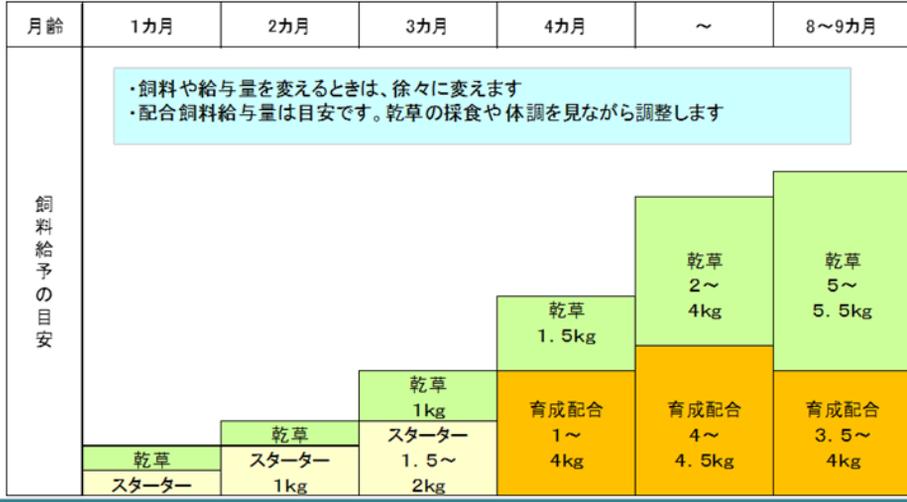
ポイント やっぱり大切なのは「意識的な発情発見」！

そのためには記録をつけることも重要です！カレンダーやアプリなど使いやすいものでOK！作業する人みんなでき共有できるようにしましょう。

いろいろな要因が経営に影響を与える中、発情発見などの繁殖管理は情勢に左右されずに改善できる項目です！少しでも繁殖成績の改善・向上につなげて、経営のロスを減らしましょう！！

【子牛育成期の飼料給与】 ～「岩手県肉用牛飼養管理マニュアル」から～

育成期間中、牛は大きく成長します。骨格、内臓ともにこの期間に成長の7割が集中します。粗飼料主体の給与で内臓を十分に発達させます。粗飼料は不断給餌とし、第1胃が出来上がる6か月齢迄は栄養価が高く軟らかめの乾草を、7か月齢以降は硬めの粗飼料を給与して第1胃の筋肉層の発達を促します。



配合飼料は、採食状況をよく観察し、発育段階に必要なとされる量を給与します。

なお、スターターから育成用配合飼料への切替は、2週間程度かけて徐々に行います。

骨を作るためにはCa、Pなどのミネラルが必要です。また、セレン等微量成分を含む鉱塩も与えましょう。

マニュアルのダウンロードはこちら→

